

(論 文)

PCLLを利用した映画英語授業^(注1)

チェンバレン 暁 子

キーワード

PCLL CALL 英語教育 コミュニケーション 映画

要約

コミュニケーション重視の英語教育が盛んに行われる中、オーセンティックな教材として映画を英語授業に取り入れる試みへの関心は一層高まってきている。そんな中、映画を取り入れて行う授業の環境も従来のLLからCALLへ、そしてPCLLへと移行し、マルチメディア学習支援ソフトも年々進化し続けている。進化する英語教育環境の中で、PCLLを利用した映画英語授業の実践報告及び、学生と教員のフィードバックに基いてPCLLの課題を論ずる。

1. はじめに

国際社会のグローバル化に伴い、コミュニケーションの手段としての英語の必要性が高まる中、映画は学生の興味を引き易く、またオーセンティックな口語英語に触れる機会を容易に提供してくれることから、英語授業で利用されることが多くなってきた。映画は授業の中で、文化的側面の学習やスクリプト・リーディングなど様々な角度からの利用可能であるが、特にリスニングや発音、スピーキングなどのアクティビティーを中心に授業を行う場合、その環境が重要であると考ええる。これまで、映画や画像を使った授業ではTV画面や大型スクリーンで映画を見せながら一斉にリスニングを行う方法が取られる事が多かった。また比較的聞き取り易い部分を選んだつもりでも、ナチュラル・スピードで話される映画の英語は、多くの学生にとっては速すぎて難しいと感じることが少なからずある。そのような状況の中、近年の急速なIT技術の進歩に伴って教育の場においてもCALL (Computer Assisted Language Learning) やPCLL (PC Language Laboratory) が普及し、学生一人一人が自分の
1

レベルやペースに合わせてリスニングや発音の練習を行うことが可能になってきた。語学教室の環境はハード面、ソフト面共に年々変化し続けており、学生にとっても教員にとってもより理想的な授業環境が整えられてきているように感ずる。本稿では、まず映画を利用した授業環境の変遷を概観し、次に最新のPCLLシステムとその映像支援ソフトで可能になった事柄の紹介を行う。更にそれらを利用した学生と教員のフィードバックと問題点について述

べ、最後に今後の展望について触れたい。

2. 映画を使った授業環境の変遷

澤田(2007)が「外国語教育は他の教科と違い機械や技術の発展に影響を受けやすい」と述べているようにITやAV機器の技術発展は、英語授業の環境にも大きな影響を及ぼしてきている。まずそれらの変遷を概観する。

ハード面である教室環境として、現在のPCLLの母体となるものが、LL(Language Laboratory)であった。LLは1930年代にオハイオ州立大学のRalph H.Waltz教授と音声学担当のG.O.Russell教授によって現在のLLの先駆といわれる設備が考案され、アメリカでは1940年代から本格的に学校教育に導入された。日本では戦後1950年代より徐々に大学に導入されていった。初期のものとしては音声をオープンリールに録音したものが始まりで、70年代にはカセット・テープが普及したことで、機器の開発と共に理論や実践面からの研究も盛んに行われるようになった。そして外国語学習の実践においてLLは必要不可欠な施設として評価され始めた(神崎, 2010)。また、70年代後半から80年代にはビデオが普及したことで多数の教育機関はLL教室にVTRを設置し、一般の映画も英語授業に導入されるようになり、視聴覚面でも充実した時期となった。更に、1995年にWindows 95が登場しPCが急速に普及し始め、またCDやDVDが普及することで、LL設備は教員卓にPCやAV機器が導入され、LLとCALLの併用期としてマルチメディアLLが1990年代後半より普及し始めた。この時期はまだPCとLL機能には連携はなく、CALLとして使用された。田中(2006)が述べているように、CALLはコンピューター技術を利用した幅広い分野での語学学習全般を指す。

2000年初頭より、音声は専用線で送信し、映像もビデオプレイヤーから中間モニターに配信するPCをベースとしたハイブリッドタイプLLが使用されるようになった。そして、2000年半ばまでLLとPCの併用期が続き、それと重なるかたちで、2000年初頭より徐々にPCで従来のLL機能を制御するPCLLシステムが登場した。PCLLはPCを利用して、従来のLL機能と映像・音声、文字、更にインターネットなどを全てPCのモニター上のコントロールパネルで制御できるシステムを指す。2003年度より、PCネットワークのみで実現したフルデジタルタイプの映像・音声配信、録画システムが登場し、画像と音質もかなり向上した。タッチパネルが導入されたことで、教員が利用しやすい工夫も施されている。それに付随し、学生が各自のペースで映像を再生し、Listeningや発音練習、音声の録音などを可能にした映像・音声支援ソフトも進化した。現在、日本国内では「L³Stage」、「CaLabo」、「PC@LL」、「WeLL」の商品名でパナソニック、チエル、内田洋行、ビクターの4社がフルデジタルPCLLシステムを製造している。(注2)

3. 「L³StageEZV」を利用した映画授業

2 3. 1 教室環境

次に筆者の教える関東の私立大学における、映画を使った英語授業の環境について紹介する。映画を使った英語授業は2002年度までは従来のLL教室または、プロジェクターとスクリーンが利用できる教室で行なわれていたが、2003年4月より映画英語授業が必修の基礎科目となったことでパナソニック社の「L³StageEZ」が導入された。必修科目であるため、英語が苦手な学生も多いが、各自のレベルにあった学習のできるPCLLが導入されたことで、学生から映画の英語は難しすぎるといった声は殆ど聞かれない。授業の中では、主にリスニ

ングやディクテーション、発音、ロールプレイなどの練習を取り入れ、映画というオーセンティックな教材を用いながらコミュニケーション力養成を重視した授業が行なわれている。2010年4月より「L³StageEZV」が導入され、デジタル音声を用いたことで音質に優れ、スピードコントロールの音質がかなり向上したので、映画を使った授業は初級者にも一層受け入れられやすくなってきている。

3. 2 PCLLを利用して可能になったこと

PCLLを利用することで、可能になった事を紹介する。(2003年に導入された「L³StageEZ」を以後、EZとして、また2010年4月に導入された「L³StageEZV」を以後、EZVとして表記する。)

・学生機で可能なこと

- ① 教員側からDVD等の映像・音声を学生各自のパソコンのハードディスクに一斉送信し保存することで、送られてきた字幕あり、字幕なしなどの映像・音声や、さまざまなシーンを学生が自由に選択して使用することが可能となった。(EZとEZVの両方で可能)
- ② 学生はスピードコントロール機能を利用し、±50%の幅で各自のレベルに合ったスピードで映画のリスニングやディクテーションを行うことが可能となった。スピードコントロールは、従来のアナログ環境では速度を落とすと音声が低くなるなどの音質の変化が避けられなかったが、デジタル音声を利用することで音質に殆ど影響のない状態で速度を調節できるようになった。(EZのスピードの変化は±30%であるため、EZVの±50%と比較すると十分にその効果が得にくい。)
- ③ 発音練習の形態を変えて、発音練習と録音を行うことができるようになった：パート練習、シャドウイング、リピーティング (EZとEZVの両方で可能)、タイピングしながら行えるディクテーション機能、アフレコ機能。(EZV)
- ④ 録音した音声を直ぐにモデル音声と聞き比べたり、簡易スペクトグラム (波形パネル) で表示することで、目と耳の双方で自分の音声を確認できる。(EZとEZVの両方で可能)
- ⑤ また、授業で使われた教材や課題教材をUSBメモリーに保存し各自自宅に持ち帰り、自宅学習ができる。(EZとEZVの両方で可能)

・教員機で可能なこと

- ① 画像・音声・文字の全てをデジタル化して取り込み、PCモニター上のタッチパネルで全てを制御できる。(EZとEZVの両方で可能)
- ② 学生が授業中に勝手にインターネットにアクセスして、授業参加していないことがしばしば見受けられたが、授業以外のPC画面へのアクセスをブロックするための機能が付加された。また教員モニターから学習者の全員のモニターを一覧できる機能も加わり授業への参加を促す機能が付加された。(EZV) また、従来のLL同様にインターコムを利用して学生に注意することも可能である。(EZとEZVの両方で可能)
- ③ 学習者の発音した音声を回収し、ファイルに保存して後に評価する事も可能である。(EZとEZVの両方で可能)
- ④ アナライザー機能で評価を行うことができる。(EZとEZVの両方で可能)
- ⑤ オーサリング (教材作成) 機能により、画像上での分割、ポーズ挿入などの編集が可

能となり、画像を使った試験の作成が容易になった。(EZV)

4. フィードバック

4. 1 学生のフィードバック

2010年春学期の授業で10週間PCLLを使用した後、学生58名にPCLLについてのアンケート調査を行った。結果は図1の通りである。

「自分のペースで学習ができる」と「スピードコントロール」は7割近くの学生が良かったという評価を示した。英語の苦手な学生でも映画を最初から分からないと諦めずに、スピードコントロールを利用しながら自分のペースで何度も繰り返し練習できたことが評価されたと考えられる。また、英語字幕も最初は字幕なしでディクテーションを行い、その後英語字幕に切り替えて音声を確認することで英語の音声変化や、聞き取れなかった部分の分析ができて良かったと感じる学生が多かった。一方、自分の発音した音声を録音してモデル音声と聞き比べる機能や、簡易スペクトグラムである波形パネルは共に余り高く評価されなかった。その理由として、学生が自分の発音を聴く事を嫌がること、学生の発声音が小さく、波形パネルに表われにくいことも原因と考えられる。評価の高かった自分のペースで学習ができることへの評価と、波形パネルについての低い評価に関しては、田中（2006）が学生に行ったアンケート調査（CALL機利用のメリット）の結果とも一致する。

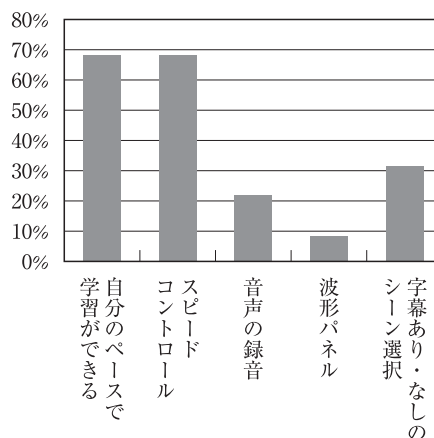


図1. PCLLで役に立った機能

4. 2 教員のフィードバック

2010年の春学期に映画英語授業を担当した教員（5名）が授業で重視した項目（図2）とPCLLの映像支援ソフトの使用状況（図3）を調査した。（共に複数回答）

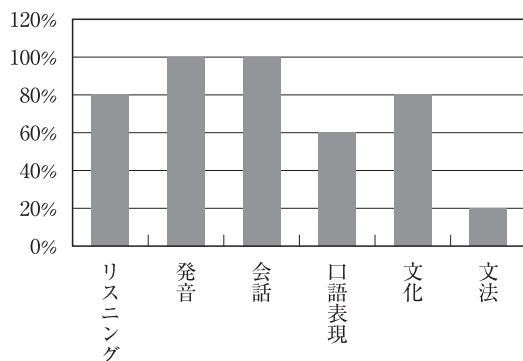


図2. 教員が映画を使った授業で重視した項目

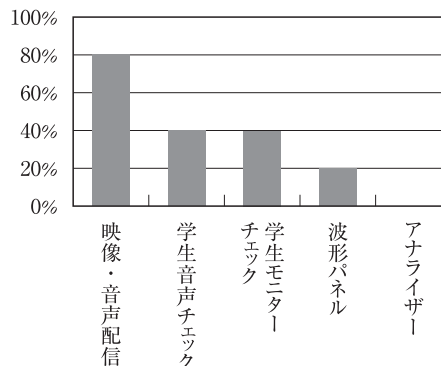


図3. 教員が学期中使用したPCLLの機能

図2より、発音、会話、リスニング、口語表現、文化とコミュニケーションを重視した授業が行なわれたことがわかる。

また、PCLLの機能の利用に関しては、学生のPCに映像・音声を送信する機能は殆どの教員が毎回使用していた。一方、学生が役に立ったと答えたスピードコントロール機能や、音声を録音させモデル音声と比較する機能、波形パネルなどを使用した教員は予想を遥かに下回り、アナライザー機能は全く利用されていなかった。

4. 3 教員の感想

以下は、PCLLの新機種「L³StageEZV」の導入後、1学期間使用した教員の感想である。

「操作が複雑なため慣れるまでに時間を要し、不安を抱えながら授業を行っていた。」
「授業内で操作がうまくいかず、授業が中断することが何度かあった。」
「頻繁に使い方のフォローが欲しかった。」
「役に立ちそうだが、使わなかった機能が多い。」
「個別学習の場合、注意が行き届き難い。」などの感想が聞かれた。

新機種が導入された学期の初めにメーカーが行った使用説明会に教員は1時間から2時間程度出席した。特に機種が新しくなったことで、教員は慣れる迄、新たな不安を持ちながら授業に臨んでいたことがわかった。新しい機種になって、より機能が増加した分、これまで1台のPCモニターで全ての操作がコントロールできていたものが、2台のモニターを使用することになり操作に不安を覚えたようである。教員が新たに加わった機能を含め自在に使いこなせるようになるには、1～2時間程度の説明会では不十分であるため、使用法のサポートやトラブル発生時のサポートを行うスタッフが授業中に常駐することが必須であると考えられる。メーカーによっては、サポートスタッフを派遣するというサービスを行っているものもあるようだ。また、新しい機能に関する説明会を定期的に提供することによって、数多くある機能を十分に授業で活用できるようにすることが必要である。

5. 今後の展望

外国語教育は元来（機器の）技術の発達の影響を受けやすい上、サイクルの速い技術変化と無関係に教員生活を終えることは、もはや不可能であり、技術の進歩に対応のできる教員のための教育プログラムが必要であると澤田（2007）は指摘している。平成21年度の文部科学省が行った調査によれば、PCを操作して校務に活用することができる教員は高校レベルでおよそ全国平均74.5%に達するが、実際にPCを用いて指導できる教員は61%とそれを下回る。一方、多忙な教員にとっては止むを得ないと思われるが、講習に参加している教員は僅か20%弱であった。テクノロジーの進歩と共に、学生にとっても教員にとってもより理想的な語学授業環境が与えられてきているように感ずる一方、今回の調査が示すように、様々の有用な機能の多くが利用されていないことが明らかになった。教員側はそれらを十分に利用するために研修への参加や、実際に授業を行ないながら時間をかけて機器に精通することが必要であるため、少なくとも教員が安心して授業に臨む事が出来るようになるまでは、教員をサポートする体制の整備が非常に重要である。

学生にとっては、各自のレベルやペースに合わせての学習が可能となったことなど好評であるが、今後PCLLの持つ様々な機能を利用してどのような効果が得られるのか、いかなる使い方が学習効果向上に役立つのかを調査し、検証してゆくことが重要な課題といえよう。

注

1. 本稿は2010年8月6日に札幌で開催された映画英語教育学会大会に於いて行った口頭発表を加筆修正したものである。
2. パナソニック・システムソリューションズ・ジャパン株式会社SEセンター作成の製品開発フローチャート参考。

参考文献

- 文部科学省 (2010) 『平成21年度学校における教育の情報化の実態に関する調査結果』
<http://www.japet.or.jp/Top/Cabinet/>
- 神崎和男 (2010) 「LL歴史資料室」『外国語教育メディア学会50年の歩み』外国語メディア学会
- 角山照彦 (2008) 『映画を教材とした英語教育に関する研究』, 10-33. 岡山：ふくろう出版
- 澤田茂保 (2007) 「英語教育から見た技術の発展とIT利用の可能性について」『外国語教育フォーラム』, 1:37-50. 132-147
- 田中深雪 (2006) 「マルチメディア時代の通訳訓練 - CALLシステムとその有効活用について」, *Interpretation Studies*, No. 6, December 2006, 183-196
- 東矢光代 (2001) 「CALLが外国語教育に及ぼす影響」(1) 言語文化研究紀要 *SCRIP-SIMUS*, No.10

(受理 平成23年1月8日)